

第 100 回全国高等学校野球選手権茨城大会を振り返って

野球部顧問 塚田 浩幸

1 はじめに

私が本校に赴任し、野球部の指導に携わるようになって部長として5年、監督として3年が経ちました。昨夏（平成29年7月）の大会では、1回戦で水戸商業高校に1-0のサヨナラ勝ちをしたものの、2回戦では土浦湖北高校に0-4の完敗。後に大学野球でも活躍する好投手を擁しながらも満足のいく結果を残すことができず、監督としての力不足を痛感し、非常に悔しい思いをしました。その経験をもとに、強豪校ともしっかりと戦えるだけの攻撃力を付けることを課題として、今年のチームはスタートしました。そして、試行錯誤しながらも、第100回全国高校野球選手権茨城大会では、本校10年ぶりのベスト8に入ることができました。本稿では、この1年間の取り組み、また、今年の夏の大会をどのように戦ってきたかを紹介したいと思います。



2 チーム作りの基本的な考え

私が赴任した当時、本校は1学年4クラスの学校で、しかも定員割れを起こしているよう状態でした。そのような状態にもかかわらず、同じ市内の小川高校の閉校に伴い、平成23年度より1学級増の5クラス編成になったのです。当然、200名の定員を満たす受験生は集まらず、定員の約80パーセントしか入学生を確保できませんでした。生徒の様子はどういうと、一部にやや落ち着きがないところが見られ、自信を持って「いい学校です」と言えるような学校ではなかったような気がします。恥ずかしながら、私が担任するクラスでは、特別指導が絶えないような状態でした。

校内がそのような状態なので、野球部の様子も厳しいものでした。当時3年生は12名いましたが、2年生は6名しかおらず、新入生が入部してくれないと、夏休み以降、チームの存続が危ういような状況でした。幸いにも1年生が4名入部してくれて、何とか大会に参加できると安堵したことを今でも覚えています。

そのような厳しい状況の中、前監督の田口先生と私は「野球選手である前に一人前の高校生であれ」ということを基本方針として指導にあたっていました。そして常に「感謝」の気持ちを持ちなさい、ということも生徒には伝えていきました。野球をやらせてくれる両親、野球ができる環境があるから自分たちは高校野球をすることができるのだと。誰からも応援される人間、そしてチームになることも求めていきました。最初は戸惑っていた選手たちでしたが、田口先生や私の言うことを理解して行動するようになりました。休日の練習前には必ず校内外の環境整備を行うようになりました。学校生活ではクラス役員などに積極的に立候補するようになり、また、以前はどちらかというと迷惑をかける方が多かったのですが、担任の先生や教科担当の先生方から頼りにされるようになってきました。地域住民の方からは、困っていたところを野球部の生徒に助けてもらったというような電話をいただいたり、茨城県高等学校PTA連合会から善行賞をいただいたりもしました。

そして、これらのことを地道に続けていく中で、部員の数も徐々に増えていき、10名から

始まった中央高校野球部も 50 人近くまでになることができました。すると、以前はなかなか勝ちきれないところがあり、いい試合をして終わっていた我がチームですが、チーム内に競争が生まれ、お互いに切磋琢磨して技術も向上していき、少しずつですが力のあるチームと戦えるようになっていきました。

野球に限らず、他のどの競技にしても同じだと思いますが、スポーツとは人間がやるものです。いくら技術が高くても、体に指令を出す人間が未熟では力を十分に発揮することはできません。私は、技術を高めることと同時に「人間力」を高めていくことが、野球部として、そして高校生として結果を出すことに繋がると考えています。選手には、目標は甲子園に行くことだが、目的は「人間力」を高めることだと常々話をしていきました。

3 新チーム発足から秋季大会に向けて

平成 29 年 7 月 16 日。土浦湖北高校に負けた翌日、新チームがスタートしました。旧チームからレギュラー選手だったのはキャッチャー、セカンド、ショート、センターの 4 選手。ピッチャーを除くセンターラインが残っているのは、チームとしては非常に大きかったです。ただ、野球にとって一番大事なピッチャーがいませんでした。夏の大会にベンチに入っていたのは川名だけ。その川名も公式戦登板の経験なし。それ以外のピッチャーに関しては、ベンチ入りすらできない状態でした。

そこで、最初のミーティングで、「今年のチームはある程度守れるようになるだろう。でも、ピッチャーがいなければ話にならない。このチームはピッチャーが弱い。最終的には強豪校の 130km/h オーバーを投げるピッチャーを打てる攻撃力を付けなければならないが、まずはピッチャーが頑張って力を付けなければ、このチームは勝てないチームになるよ」という話をしました。あとから聞いた話ですが、私の「今年はピッチャーが弱い」という言葉は、ピッチャー陣にとってかなりショックだったらしく、「このチームはピッチャーで勝ったと言われるように、みんなで頑張っていこう。俺たちが成長しなければ、このチームは勝てないんだ」ということをピッチャー同士で話していたようです。選手の心に刺激あたえるというのは非常に大事なことで、指導者の言葉がうまく伝わった良い例だと思います。

さて、話は戻りますが、夏休みの練習は、通常であれば、キャッチボールやゴロ捕球等の基本的なことを重点的にやっていきます。しかし、今年のチームは、センターラインの選手が残っていたということで、実戦練習をより多く行うことができました。練習試合では、私の野球観やこの場面で何が求められるのか、何を考えてプレーするのかを伝え、とにかく漠然とプレーをしない、根拠を持ってプレーをすることを求め続けました。凡打やミスに対して責めるのではなく、その時に何が必要で何が足りないのかを伝えていきました。その代わり、積極的にバットを振らなかったり、走るべきところで走らなかったり、消極的なミスをした場合は徹底的に指導しました。

夏休みを順調に過ごし、迎えた秋季県大会水戸地区予選。本校は夏休みのシード決めの大会で水戸地区でベスト 8 に入り、準々決勝で常磐大高と 4－6 のゲームをしたことが評価され、A シード校に選ばれていました。代表決定戦の相手は、初戦を勝ち上がってきた鹿島高校です。力はほぼ互角。経験の分、やや本校が有利だと思っていました。心配なのは、本校が平成 12 年に秋季県大会に出て以来、16 年間県大会に出場できていないということでした。県大会に出場するということは本校にとって、そして選手にとっても高い壁。「気持ち的に受け身にならないように、攻撃でも守備でも走塁でもすべて攻めていかなければ結果は出ない。」と、自分にも選手にも言い聞かせていきました。

そんな中、問題発生です。試合前日に、5番バッターを主に任せていた選手が、授業中に携帯電話の着信音が鳴ってしまい、段階指導になってしまったのです。先ほどチーム作りの基本的な考えの中で述べさせていただいたように、本校野球部は野球の技術が高ければそれで良いという指導はしていません。まずは高校生としてやるべきことができなかったら、練習はさせないという方針でやってきました。通常であれば、この選手はしばらくの間グラウンドにも入れず、練習にも参加させません。しかし、試合前日に段階指導を受けるとは想定外で、まさかという思いでした。私自身、なんとしても県大会に出たいと強く思っていましたし、中軸を打つ選手が試合に出られないということになると、得点力がダウンし、より厳しい戦いになってしまう。この選手を試合で使うかどうか本当に悩みました。そこで決断することができたのは、キャプテンの平澤の言葉があったからです。平澤は「段階指導になってしまう選手は、野球をする資格はありません。そんな選手が試合に出たとしても結果は出ないし、ミスをして足を引っ張るようなことになると思います。」と言ったのです。これを聞いてハッとしました。私が一番ブレていたのです。大事なことを見失っていました。この件で、チームとして進むべき道がより明確になりました。翌日の代表決定戦では、戦力的にはダウンしたものの、心を一つにした戦う集団として試合をすることができました。鹿島高校を4－3で破り、16年ぶりの県大会出場を決めることができたのです。

県大会では、初戦で甲子園帰りの土浦日大と対戦し、2－7で敗退しました。5回まではお互い無得点でしたが、6回以降は防戦一方で、コールド負けを免れるのが精一杯でした。やはり、強豪校の打線を抑えるだけの投手力と130km/hオーバーの投手を攻略できる攻撃力が課題となりました。ただ、この敗戦は選手にとって自分たちを見つめ直す良い機会となったようです。

第70回秋季関東高校野球県大会地区予選 〈水戸・代表決〉

2017/09/11 県営球場

第2試合

チーム名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
鹿島	1	1	0	0	0	0	0	0	1	3
中央	0	0	3	0	1	0	0	0	X	4

【鹿島】 諸徳寺－宮村

【中央】 川名、矢板－平沢

▽二塁打 磯，平沢，高野（中）

第70回秋季関東高校野球県大会 〈2回戦〉

2017/09/21 笠間市民球場

第2試合

チーム名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
中央	0	0	0	0	0	1	0	1	0	2
土浦日大	0	0	0	0	0	3	1	3	X	7

【中央】 高橋，川名，矢板-平沢

【土浦日大】 富田-小沢

▽三塁打 鈴木（土）

▽二塁打 鈴木，井上（土）

▽暴投 高橋

▽試合時間 2時間

▽審判 石野，仲田，星野，菅谷文

4 冬季練習の取り組み

高校野球では、12月から3月上旬までは練習試合ができない、いわゆるオフシーズンになります。この時期は、ほとんどのチームが秋までの課題を克服し、春以降の戦いにつなげるための期間になります。本校では、まず身体作りを課題の一つに挙げました。身体が大きくなり筋量が増えることで、けがや故障をしなくなり、また、身体が大きくなるとボールが遠くに飛んだり、球速があがるとされています。身長(cm)－100＝理想体重(kg)とし、それに満たない者にはノルマを与え、それをクリアしていない場合は、全体練習に参加させないという方法をとりました。具体的には、定期考査明けの練習までに1.5kg増やすようにという指示を与えました。年明けの練習時に、30人近くの部員がいるのにグラウンドには7人しかいないということがあったりして、こちらが根負けしそうになりましたが、ぶれずに続けました。というのも、今までも練習の合間に補食をとり、休日の練習では1kgの炭水化物を摂らせてきましたが、大きな変化が感じられなかったからです。結局、家庭では一般高校生と同じような食事しかせず、野球部での補食と1kg飯だけで満足している選手が多かったのです。数字は嘘をつきません。練習時の補食と1kg飯は継続しつつ、保護者にも協力を依頼し、選手には数字で結果を出すということ求めました。結果として、練習試合解禁時には、チーム平均で約5kg増え、体つきも一回り大きくなり、打球も秋とは比べものにならないくらい強くなりました。

身体作りと並行して取り組んだのは、野手はスイングスピードアップ、投手は球速の10km/hアップです。正しい動きづくりと、身体を作っていくことで、野手は11人がスイングスピードが130km/hを超え、一番速かった者は150km/hを超えました。野手に関しては順調に成果を出すことができました。

問題は投手です。強豪校を抑えるためには、一般的には140km/hを超えるストレートを投げられることが求められます。今はどのチームもピッチングマシンを持っており、130km/h前後のボールでは打ち頃になってしまいます。投手全体には球速10km/hアップを課題としましたが、秋の大会に登板した川名，高橋，矢板には個別の課題に取り組ませました。球速は川名，矢板で115km/h，高橋は100km/hを超えるのがやっと。正直，投手には能力の限界を感じていました。昨年のような飛び抜けた投手がいないので，継投で戦うしかありません。しかも，3人とも右のオーバーハンド。違ったタイプの投手で9イニングを戦わなければ，勝負にならないと考えました。右のオーバーハンドとしてそこそこまとまっている矢板は，縦系の変化球の習得を課題にしました。高橋は筋力的に速いボールを投げるのは厳しいと考え，スローカーブを習得して，遅いボールと速いボールの球速差を30km/h以上出すことを目指しました。それにより，遅いストレートを速く感じさせ，スローカーブで目線を上にずらすことでタイミングを取らせにくくするという意図です。また，高橋のストレートは素直にまっすぐ行くことはほ

とどなく、カット気味に曲がったり沈んだりしました。それを生かすという意味合いもありました。川名はこれといった特徴のない、ただの右投げの選手でした。それは川名自身も感じていたようで、サイドスローへの変更の提案もスムーズに受け入れてくれました。ピッチャーにとってフォームを変えるというのは非常に大きいことです。選手が受け身だとうまいかないうことが多いもの。選手と監督の意見が同じだったというのが本当に大きかったです。また、右のサイドスローは最近珍しいわけではないので、極端にクロスステップして、投球に角度をつけさせました。とにかく、普通のピッチャーでは厳しいと考えたのです。普通だから打たれる。異常さを求めました。そこから導き出されたのが超クロスステップです。しかし、クロスステップすると体にはかなりの負担が来ます。川名の体の強さを生かしての決断です。壊れるか成功するか、賭けの部分もありましたが、川名も私の考えに同意してくれましたし、本人のひたむきな取り組みが後の成功につながったのだと思います。

5 春季大会を戦って

オフシーズンを順調に過ごし、3月の第2週からいよいよ練習試合が解禁になりました。野手に関しては身体もできてきたことで、バットスイングだけでなく、ボールを投げる・捕るということにも安定感が出てきました。打ち取った打球はしっかりとアウトにすることができるようになり、悪送球による無駄な進塁を与えることも少なくなりました。守備に関しては何かを重点的にやったわけではありませんが、ゴロを捕球する、キャッチボール等の基本を惰性でやらないように、繰り返し毎日やってきたことが良かったのかもしれません。打つ方も飛距離が伸びてきて、今まで出なかったホームランも出るようになってきました。

投手に関しては、川名のフォームがある程度固まり、矢板も球速が上がり変化球も使えるメドがたってきました。高橋は少しは球速は上がってきたもの、110 km/h に届かない程度。バットをしっかり振ってくるチームにはうまくはまるかもしれませんが、普通のチームには怖くて投げさせられない感じでした。しかし、その他の下級生の投手はまだ身体ができておらず、公式戦で投げられるだけのレベルではありませんでした。基本的には3人の投手を中心に、相手チームとの力関係や相性を見ながら、練習試合からいくつかのパターンの投手起用と継投を試していきました。

この時期の練習試合は、基本的にはベストメンバーで戦うことはしませんでした。選手それぞれがオフシーズンの間に懸命に弱点を克服し、レギュラーになるために努力をしてきました。練習で少しでも伸びたものが見られれば、それを褒めて認め、練習試合でチャンスを与えました。選手は、「頑張れば試合に出られる」「頑張ればレギュラーになれる」という気持ちがあつたと思います。選手全員がモチベーション高く野球に取り組めて、お互いに切磋琢磨していく雰囲気を作るようにしていきました。

個々もレベルアップし、大会直前の練習試合も良い形で終わり、春季水戸地区大会の組み合わせが決まりました。本校は秋季大会で県大会に出場したので、Aシードを獲得。鉾田二高と水戸農業高校の勝者と対戦することになりました。私はその試合を見に行ったのですが、序盤は、入学したばかりの1年生が主体の鉾田二高が優位に試合を進めていました。途中まではそのまま鉾田二高が勝つのではないかという試合内容でした。しかし、最後には一冬越えた2年生が力を発揮し、相手のミスもあり、水戸農業が勝ちました。試合を見る限りでは、水戸農業はそこまでバットが振れているわけではありませんでした。投手も球速は120 km/h程度で、警戒するような変化球もありませんでした。今思えば、そこが敗因だと思うのですが、私自身が「勝った」と思ってしまいました。自信ではなく慢心です。選手にはそれが伝わってしまっ

たのかもしれませんが。

代表決定戦は、川名で行けるところまでいって、残りは矢板で締めるというプランを立てました。高橋の遅いボールでは、振れていない打線に合ってしまうと考えたからです。ところが、試合の3日前。川名がインフルエンザになってしまったのです。秋季大会に続き、トラブル発生です。嫌な予感がしましたが、選手にはそれほど動揺は見られず、矢板に9イニングを頑張ってもらうしかないと伝えました。多少は打たれても、2・3点くらいには抑えてくれるだろう。相手の投手力と本校の打線の力関係では、4・5点は取れるだろう。そのように考えていました。

さて、試合当日です。私の予想は大きく外れました。矢板が全く通用しないのです。ストレーンを投げて、変化球を投げて、全員が迷いなくバットを振り抜いてくるのです。サインが相手にばれているのかと思うほどでした。この試合、相手の三者凡退はなし。被安打17という完敗でした。17本もヒットを打たれて、よくコールドゲームにならず、7点に抑えられたと思います。選手には「1試合で4つも併殺を取るのだから、守りは頑張った。打線もリズムが良ければもっと打ったはずだ。この敗戦を夏に生かそう」というのが精一杯でした。私自身もかなりショックでしたが、何より選手にとってもショックだったようです。しかし、この敗戦は、秋の土浦日大戦の時とはまた違った刺激をチームに与え、夏の大会に向かうにあたって、もう一度自分たちを見つめ直す機会を与えてくれました。

第70回春季関東高校野球県大会地区予選 〈水戸・代表決〉

2018/04/20 笠間市民球場

第3試合 開始時間(13:30)

チーム名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
水戸農	0	0	2	0	0	2	0	0	3	7
中央	0	1	0	0	1	0	0	1	1	4

【水戸農】 飯田，小泉，益子－戸沢

【中央】 矢板－平沢

▽三塁打 高野，佐藤（中）

▽二塁打 照沼，長谷川琉，小室隆（水）

6 春季大会後から夏の選手権大会に向けての取り組み

春季水戸地区予選の翌日。気持ちの整理をつける間もなく練習試合です。選手には毎日、野球日誌をつけさせているのですが、それぞれが何を感じているのかを確認したかったので、提出させました。「秋の県大会に出て、自分たちは強いと勘違いしていた。もう一度挑戦者として頑張っていきたい」「打てないなりに得点できるような攻撃力を身に付けたい」「ピッチャーには頑張ってもらいたい」「ピッチャーを中心とした守りからリズムを作って、攻撃に繋がられるようにしなければ勝てない」「水戸農業戦のような試合は二度としたくない」というような言葉が見られました。

気持ちを文字に表すことで選手たちの考えがまとまり、目指すべきことが明確になったのだと思います。危機感も感じられました。その後の練習試合では、投打がかみ合い、内容的にも

いい試合をすることができるようになってきました。チームの雰囲気としては、新チーム結成後から秋季大会あたりの、勝ち続けていた頃の雰囲気が出てきました。

練習では、まず、得点力アップを目指した取り組みをしていきました。無死1塁から簡単に送りバントをする攻撃ではなく、足や小技を絡めた攻撃で、1死3塁を作る攻撃を練習していきました。バントをせず、ただ打つということではありません。相手の投手、捕手、また守備力を見て作戦を選択します。これには私からの指示だけではタイミングが遅いことが多々あります。選手の手で見て、判断する必要があるのです。そのための練習をしていきました。また、少ないヒットで得点するために、走塁の細かいところまで見直していきました。投手に関しては、高低左右で揺さぶるだけでなく、奥行きで勝負するための配球を考えさせました。当然、ブルペンから常に意識をして投球練習をさせました。練習試合では、「抑えた」「打たれた」で判断するのではなく、なぜそのボールを勝負球に選択したのか、その前のボールはどんな意図を持って投げたのか等を問い、根拠を持った配球を求めていきました。

6月中頃になると、練習試合では思い描いたような試合運びをすることが多くなってきました。成功体験を重ねることで選手たちは自信を深め、それが力になっていきました。不安だった投手陣もそれぞれが特徴を理解し、いいボールを放るのではなく、バッターが打ちにくいボールを放る、持ち味を生かすことに意識を向けられるようになりました。打線は毎日140 km/hのボールを見ることで、相手投手のスピードにしっかり対応し、自分たちの間でバットを振れるようになりました。選手も私も「やれる」という手応えを感じ、心身共に良い状態で夏の選手権大会に臨むことができました。

7 選手権大会での戦い

(1) 1回戦 水戸桜ノ牧高戦

初戦から難敵でしたが、プラン通りのゲーム運びをすることができました。打線が強力で、特にキャプテンの伝谷君に打たせてしまうとチーム全体が勢いづいてしまうと考えました。初回到伝谷君をスリーボールの不利なカウントから打ち取ると、相手チームは、高橋のなかなか来ない遅いボールに見事に惑わされ、振り回すバットイングになっていきました。攻撃は、ストライクとボールをしっかりと見極め、打つべきボールをコンパクトに強く叩くことができ、12本のヒットを打つことができました。快心のゲームで、後に続く勢いのついたゲームでした。

第100回全国高校野球選手権茨城大会 <1回戦>

2018/07/09 ノーブルホーム水戸（水戸市民）

第1試合 開始時間(10:00)

チーム名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
水戸桜ノ牧	0	1	0	1	1	0	0	1	0	4
中央	1	1	1	0	0	0	4	0	X	7

【水戸桜ノ牧】金井，仲内，平賀－伝谷

【中央】高橋，川名－平沢

▽三塁打 伝谷(桜)，高野，高草木(中)

▽二塁打 龍頭, 内山(桜)
▽暴投 仲内 2, 高橋
▽試合時間 2 時間 23 分
▽審判 小川, 藤田満, 坪井, 須藤

【戦評】 水戸桜ノ牧 - 中央
中央, 打ち勝つ

【評】 中央が強打・水戸桜ノ牧のお株を奪う 12 安打を放ち快勝した。

中央は同点で迎えた七回 1 死二塁で高野が投手強襲の内野安打を放ち勝ち越した。さらにその後、相手投手の暴投と磯の中前 2 点打で得点を重ね突き放した。

水戸桜ノ牧は中盤まで粘り強く戦ったが、連打は四回の 1 度だけにとどまり、投手陣を援護しきれなかった。

1 番・高野躍動 3 安打 1 打点

○…中央のトップバッター高野裕也(3 年)が 3 安打 1 打点の活躍を見せた。

第 1 打席はいきなり右中間への三塁打を放ち、先制の足掛かりをつくった。第 2 打席も中前打から二盗を決め 3 点目のホームを踏んだ。第 4 打席は七回裏 1 死二塁で投手強襲の内野安打を放ち勝ち越し点をたたき出した。直前の表の守備でフライを捕った際に足をつっていたが、必死に走った。

難敵・水戸桜ノ牧を破っての 2 回戦進出。「自分が打てば盛り上がる。次も打ちたい」と気合十分だった。

(H30. 7. 10 茨城新聞より)



(2) 2回戦 茨城東高戦

茨城東は人数はいませんが、ピッチャーの大川君は140km/hのボールを投げるような素晴らしい投手です。私立高校でもレギュラーになれる選手なので警戒していました。打ってもホームランを打てる選手です。もしかしたら序盤はリードされるかもしれないが、中盤以降必ずチャンスがくるから集中して戦うように、と試合前のミーティングで話をしました。まさにそのような展開になりましたが、7点差をつけられるとは思っていませんでした。正直、3回表が終わった時にコールド負けが頭によぎりましたが、ピッチャーの大川君のボールが伸びてなくなったということ、そして選手の目が戦う目でしたので、自分自身を奮い立たせ、1点を取りに行く野球ではなく、大量点を取りに行く野球をしました。結果的には打線がつながり、相手のミスもあり、コールド勝ちをすることができました。3回戦後のキャプテンのコメントが新聞に載っていましたが、この逆転勝ちには自信になったようです。苦しいゲームでしたが、この勝ちを経験したことで、チームが一回り成長できたと思います。

第100回全国高校野球選手権茨城大会 〈2回戦〉

2018/07/14 笠間市民球場

第1試合 開始時間(10:00)

チーム名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
茨城東	3	0	4	1	0	0	0			8
中央	0	0	3	3	6	4	X			16

7回コールド

【茨城東】 大川、米坂、大川、川名駿—米坂、川名竜、米坂

【中央】 矢板、川名—平沢

▽本塁打 大川(茨)

▽三塁打 平沢2、高野(中)

▽二塁打 高野、佐藤(中)

▽試合時間 2時間27分

▽審判 石野、飯村、大沼、星野



茨城東-中央

5回裏中央2死一塁、高野の左翼への二塁打で川名がかえり勝ち越し=笠間市民

【戦評】茨城東 — 中央
中央16点大勝

【評】中央が 0-7 からコールド勝ちした。打順が 2 巡目に入った三回以降は毎回複数得点。五回、高野の適時二塁打で勝ち越し。その後も攻撃の手を緩めず、一気に突き放した。

先発の矢板は制球に苦しんだが、川名が好救援した。

茨城東は初回、大川の 3 点本塁打で先制。その後も加点し大量リードを得たが、最後まで粘れなかった。

(H30. 7. 15 茨城新聞より)

(3) 3 回戦 牛久栄進戦

何度か練習試合をしたことがあり、相手チームの力量は予想できていました。打力がそこまであるわけではなかったもので、ミスによる無駄な点数を与えなければ勝機はあると思っていました。また、牛久栄進の左投手の変化球を投げるときや牽制球を投げるとき癖を見抜いていたので、精神的に優位に攻撃することができました。相手投手が丁寧にコーナーを突いていたので、1 点差のゲームになりましたが、点差以上に落ち着いて戦うことができたと思います。

第 100 回全国高校野球選手権茨城大会 <3 回戦>

2018/07/17 笠間市民球場

第 1 試合 開始時間(10:00)

チーム名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
牛久栄進	1	0	0	0	0	0	1	0	0	2
中央	2	1	0	0	0	0	0	0	X	3

【牛久栄進】 島田優一岡田

【中央】 高橋，川名一平沢

▽二塁打 塙(牛)，小沼 2 (中)

▽暴投 島田優

▽試合時間 2 時間 8 分

▽審判 田中要，塙健，山口吉，根本直



中央-牛久栄進

牛久栄進に競り勝ち笑顔で応援席に駆け出す

中央ナイン=笠間市民

【戦評】牛久栄進 ― 中央
中央、逃げ切る

【評】中央が1点差で逃げ切った。1点を追う一回、2番小沼の二塁打、2死球で2死満塁にすると、6番石田の中前2点打で逆転に成功した。

続く二回には相手のミスに乗じて1点を追加。投げては高橋、川名の継投でリードを守り抜いた。

牛久栄進は相手を上回る10安打を放ち、七回に埴の適時二塁打で1点差に詰め寄ったが、一歩及ばなかった。

中央 堅守と精神力 かみ合う

最大の特長である堅守と、試合を重ねるごとに成長している精神力がかみ合った。中央が1点差の接戦をものにした。塚田浩幸監督(43)は「選手が考えて行動できるようになってきた」と目を細めた。

持ち味はいきなり発揮された。初回、1失点後の1死三塁のピンチ。相手が放ったのは犠飛には十分の中堅への飛球だった。捕球した高野裕也(3年)はすかさず本塁へ返球し、捕手の平沢海斗主将(同)が生還を狙った相手三走をホーム手前でタッチ。相手の2点目を阻んだ高野の補殺による併殺が、結果的に接戦をものにする大きな要因となった。

3-1で迎えた七回は、1点を返され、なおも1死二塁。それでもナインは慌てなかった。この窮地からマウンドに上がった川名智也(同)は「バックを信用している」と遊ゴロ、空振り三振で仕留めた。

平沢主将は「同点になっても逆転されても、自分たちが攻撃できるチャンスがまだ3回ある。それなら勝てると話していた」と振り返った。2回戦、0-7の劣勢から猛攻撃でコールド勝ちした試合を経験したことで、「打撃にも自信がついた」(平沢主将)からだ。

チームが目標とする10年ぶり8強まであと1勝。逆転の2点打を放った石田航希(同)は「自分たちは守れる。取れるアウトをきっちり取りたい」と闘志を燃やした。

(H30.7.18 茨城新聞より)



(4) 4回戦 境高戦

2年前の3回戦で境高校と対戦し、その時は7－5で本校が勝利しました。その時の主力の1年生が最上級生になり、実力がある上に経験豊富な選手が揃い、非常に手強い相手でした。実際にゴールデンウィーク中に練習試合を行ったのですが、1－10で完璧にやられています。染谷君、山下君の二人に手も足も出ない感じでした。本校は、その日の第2試合に野口君をたまたま打っていたので、境高校の監督は彼の起用を躊躇したのでしょうか。しかし、境高校の今大会は、ここまで野口君を中心に勝ち上がっていました。染谷君、山下君は本調子ではないようでした。一方、野口君は今大会好調で、江戸川学園や土浦一高をきっちり抑えていました。調子の良し悪しで判断すると、野口君が先発すると思いますが、相性でいけば染谷君です。結果的には、調子のあまり上がらない染谷君が先発し、山下君がリリーフで来ました。調子の良い野口君が投げていたら、このような結果になっていたかは分かりません。

勝負の分かれ目は六回でした。表に川名が打たれ、3点目を与えてしまいます。0－2で膠着状態が続いていましたが、これで試合が動きました。調子が悪いとはいえ、先発の染谷君を前に得点できずにいましたが、先頭バッターが出塁します。ここで、やってきた練習の成果が出ました。残り4回の攻撃で3点差。送りバントでまず1点と考えてもいい場面ではありましたが、しかし、表に点数が入り、試合が動く雰囲気があったので、一気に同点まで狙おうと考え、3番バッターの野口にはショート前へのセーフティーバントを指示しました。野口は見事にそれを決め、無死1、2塁。ここは送りバントもある場面ですが、相手チームに動揺が見られたので、4番の松井には強攻を指示。結果、四球で無死満塁です。その後は2本のタイムリーヒットで逆転に成功。川名が終盤の難しいところを締め、4－3で勝利。10回やって1回できるかどうかの試合を、選手たちはここで出してくれました。満足のいくゲームで、ベスト8を決めることができました。

第100回全国高校野球選手権茨城大会 〈4回戦〉

2018/07/20 笠間市民球場

第1試合 開始時間(10:00)

チーム名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
境	2	0	0	0	0	1	0	0	0	3
中央	0	0	0	0	0	4	0	0	X	4

【境】 染谷，山下－大江

【中央】 高橋，川名－平沢

▽試合時間 2時間14分

▽審判 関，柿沼，石野，妻木



千羽鶴を中央の平沢主将(左)へ
託す境の田村主将=笠間市民



境-中央 6回裏中央1死満塁、高草木
が逆転の2点左前適時打を放つ=笠間市民

【戦評】境 — 中央 中央、好機に一気

【評】中盤の好機をものにした中央が境に逆転勝ちした。

中央は3点を追う六回、無死から小沼、野口の連打、松井の四球で塁を満たすと、磯の左前2点打で1点差に迫った。さらに1死満塁から高草木が左前2点打を放ち、逆転に成功した。

境は先発染谷が六回につかまった。終盤は走者を二塁まで進めたが、あと一本が出なかった。

中央 六回、3点差はね返す

高草木が殊勲打 「ここで俺に回ってこい」

〇…六回裏、中央に好機が続く。「ここで俺に回ってこい」。高草木陸生(3年)は気持ちを高ぶらせていた。

中央は初回到2点先制され、六回にも加点を許す。攻撃陣も境の先発染谷侑斗(2年)を攻めあぐね、五回までに三者凡退を2回数えた。

流れが変わったのは六回裏。染谷をつかまえ2点を返し、なお一死満塁の好機で打席には高草木。「真っすぐを狙っていた」打球は、逆転の2点左前適時打となった。高草木は「とにかくうれしい。自分たちの野球をして次も勝ちたい」と笑顔だった。

(H30. 7. 21 茨城新聞より)



(5) 準々決勝 常総学院高戦

2年前にもベスト16で常総学院と当たり、その時は、初回にノーヒットで3点を取られ、3-8で完敗しました。完全にユニフォームで負けました。名前負けです。今回こそは、その反省を生かそうとミーティングを重ねましたが、ベスト16で当たるのと、ベスト8で当たるのでは全く違い、予想以上に球場は異様な雰囲気でした。朝、球場に入るときに、開場を待つ観客の長蛇の列があり、その間を通過しての球場入りです。「中央頑張れよ」「応援してるぞ」「中央はどこにあるんだ?」「ここまでよく来たな。たいしたもんだ」等様々な声を掛けられました。選手たちはこれで舞い上がってしまいました。このような光景は見たことはあるものの、当事者としては初めてです。私も準々決勝の雰囲気にのまれてしまったのかもしれませんが。選手は、いつも通りにルーティンをこなしても、元には戻りませんでした。初回、四死球や足を絡められて失点を重ね、この時点でゲームが決まってしまいました。高橋の四死球もそうですが、今まで何度となくピンチを救ってきた守備陣がエラーをしてしまったのが大量失点につながってしまいました。

後から思ったことですが、準々決勝は普段通りに戦うことばかり考えて、相手の分析をすることや作戦などに気持ちがあまりいっていなかったと思います。この時点で既に勝ち負けの土俵に上がっていませんでした。確かに、戦力的には常総学院とは雲泥の差です。でも、もう少し何とかしたのではないかと悔しさが残っています。もう一度、あの舞台で戦わせてほしい、そんなゲームでした。そして、1年間ほぼ全てのことをこのチームの為に捧げてきましたが、それが終わった瞬間でもありました。



第 100 回全国高校野球選手権茨城大会 <準々決勝>

2018/07/22 ノーブルホーム水戸（水戸市民）

第 1 試合 開始時間(10:00)

チーム名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
常総学院	6	0	2	0	3					11
中央	0	0	0	0	1					1

5 回コールド

【常総学院】 昨野，岡田，菊地竜一草部

【中央】 高橋，川名－平沢

▽三塁打 中妻(常)

▽二塁打 菊田，昨野(常)，高野(中)

▽試合時間 1 時間 26 分

▽審判 鈴木克，妻木，坂本武，宮崎

【戦評】常総学院 — 中央

常総本領 猛攻 11 点 初回に一拳 6 点

【評】強打の常総学院が地力を発揮した。

常総学院は一回表、相手先発の制球難を突いた。3 四死球に 7 盗塁を絡め、3 安打で一拳 6 点を奪い主導権を握った。三回には 2 死から水野、中妻の連続適時打で 2 点を追加し、五回にも中妻の中越え 2 点三塁打などで 3 点を加え、勝負を決めた。先発昨野はスライダーを軸に要所を締めた。

中央は初回の守備の四死球、連続失策が大量失点につながった。攻撃は五回に高野の左越え二塁打で 1 点を返し、一矢報いた。

高橋と川名 中央、無念の二枚看板

○…中央はこれまで 2 回戦以外を高橋琉生(3 年)と川名智也(同)の継投で勝ち上がってきた。しかし、強打の常総学院には通用しなかった。

先発高橋は初回にやや制球が乱れ、いきなり 6 点を失った。「無駄なランナーを出してしまった」と悔いた。

四回からは川名がマウンドに立った。勢いを止めたかったが、五回に 3 失点。「良い流れを持って来れなかった」と無念を口にした。

結果は無念のコールド負け。それでも高橋は「仲間には感謝したい」、川名は「こういう舞台に立たせてくれたチームメイトを誇りに思う」と涙ながらに語った。

(H30. 7. 23 茨城新聞より)



第100回 全国高等学校野球選手権記念茨城大会
参加 98チーム(102校出場)

主催 茨城県高等学校野球連盟・朝日新聞社
期間 平成30年7月7日～平成30年7月25日

[illegible]

8 終わりに

今回、校長先生からの依頼もあり、野球部の1年間の取り組み、及び夏の選手権大会での戦いについて私見を述べさせていただきました。ベスト8という結果を残すことができたのも、周囲の方々のサポートがあったからこそだと改めて感じることができました。そして、英語科教諭という立場でありながら、野球部の指導に集中できる環境を作ってくくださったことに、心より感謝申し上げます。

現在、私は監督を退き、コーチという立場になりました。今後は違った角度から野球を学び、現監督の柴沼先生をサポートしていきたいと思います。また、野球部の指導を通して得たものを、これからの教員人生に生かしていきたいと思います。貴重な経験をさせていただき、本当にありがとうございました。